

私立学校特別研修会 外国語（英語）教育改革特別部会 〔東日本エリア（神奈川）〕 実施報告

主催 一般財団法人私学研修福祉会
協力 一般財団法人日本私学教育研究所 / 後援 日本私立中学高等学校連合会

小学校・中学校・高等学校等を通じた英語教育改革を進める文部科学省では、平成26年度より英語教員の英語力・指導力強化を図る観点から、英語指導力向上事業「英語教育推進リーダー中央研修」を外部専門機関に委託し実施しています。同研修は、全国の国・公・私立学校の英語教員を対象としているものの、公立学校を中心とした研修の仕組みになっていたことから、私学関係者の要望に応じて、文部科学省は平成27年度より私立学校教員が参加しやすいよう受入体制を整備し、私立学校教員も参加できるようになりました。

しかし同時に、次期学習指導要領や大学入学者選抜改革を含めて国が進める英語教育改革に係る最新の情報が、私立学校には十分に伝わっていない実情もあり、私立学校教員は公立学校教員に比べ情報量が少ない故に埒外に置かれた感は否めません。

については、私立学校においても、外国語(英語)教員の外国語(英語)力・指導力強化を図るためには、教員が21世紀型教育に相応しい最新の教授法と情報を早急に取り入れる必要があることから、当研究所では、平成27年度より専門家の指導による特別研修〈外国語(英語)教育改革特別部会〉を実施しており、平成28年度も引き続き、専門家の指導に上記の「英語教育推進リーダー中央研修」受講者の指導によるワークショップを加えて、研修を実施することとしました。

当部会【東日本エリア（神奈川）】では、初日はフランス語と英語の2カ国語の教育を行うカリタス女子中学高等学校を会場に、授業視察、同校での語学教育の実践発表、同校の語学教員との質疑応答・意見交換会を行いました。翌日はリファレンス西新宿大京ビル貸会議室において、投野 由紀夫先生による講演、私学の新しい英語教育の中核を担うべく文部科学省「英語教育推進リーダー中央研修」に参加した私学教員を講師に迎え、中央研修で最も関心を持ち、有益と感じた内容について、ワークショップを通して学びました。また、参加者の交流を深めてネットワークづくりを進める情報交換会等、多彩なプログラムを用意しました。

- ◆ 会 期 ◆ 平成28年11月25日（金）～26日（土）
- ◆ 会 場 ◆ カリタス女子中学高等学校（25日）川崎市多摩区中野島4-6-1
リファレンス西新宿大京ビル貸会議室（26日）新宿区西新宿7丁目21-3 西新宿大京ビル2階
- ◆ 参 加 ◆ 26名
- ◆ 参加対象 ◆ 私立中学校・高等学校・中等教育学校の英語科教諭
- ◆ プログラム ◆

- ① 研究授業 カリタス女子中学高等学校（授業視察等）
- ② 実践発表 テーマ 「カリタス女子中学高等学校の協同学習をベースとした英語教育」
発表者 金丸 紋子 カリタス女子中学高等学校 教諭
- ③ 質疑応答・意見交換 グループでの意見・情報交換を通して課題を探求します。
- ④ 講演 演題 「CAN-DO を日本の英語教育にどう活かすか」
講師 投野 由紀夫 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授
- ⑤ ワークショップ ※ワークショップ後にグループに分かれて意見交換会を行います。
テーマ 「英語で授業のヒント Teaching English in English」
(1) Classroom English / (2) Reading 1 / (3) Reading 2
※文部科学省「英語教育推進リーダー中央研修」受講者が担当します。
指導 伊澤悦子 駒沢学園女子中学高等学校 教諭
佐藤貴明 聖光学院中学高等学校 教諭
松本浩欣 相模女子大学中学部高等部 教諭
横内敦 横浜清風高等学校 教諭
中川右也 鈴鹿高等学校 教諭
池口勝裕 米子松蔭高等学校 教諭

◆ 日程概要 ◆

時刻	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
	30		0	0 10 30	45 50	0	30	0	45 0 20	0
11月25日(金) カリタス女子 中学高等学校				受付	開 会 式	研究授業		実践発表	分科会 質疑 応答 意見交換会	
11月26日(土) リファレンス西新宿大京 ビル貸会議室		講演	ワークショップ	昼食		ワークショップ	意見交換会	閉 会 式		

◆ 学校紹介 ◆

カリタス女子中学高等学校〔理事長 河端秀朗／校長 齋藤哲郎〕

1960年、学校法人カリタス学園を設立し、翌年に川崎市多摩区中野島にカリタス女子中学高等学校を開校した。その後、幼稚園、小学校、女子短期大学を開校し、1967年に幼稚園から短期大学までの一貫教育が完成した。

カリタスとはラテン語で「慈しみ・愛」を意味する言葉で、この校名には同校が子ども達に一番伝えたいことがよく表れている。即ち、神様は愛の方であって私達一人ひとりを掛け替えのない存在として慈しんでくださっているということ、従って私達は自分自身を本当に大切にするとともに、他の人々も心から大切にしなければならないということである。このことをすべての教育活動を通して子ども達に伝えていきたいと願っている。具体的には、「祈る心」「学ぶ心」「交わる心」「奉仕する心」の四つの心を身に付けて欲しいと呼びかけている。

◆ 講師プロフィール ◆

投野 由紀夫（とうの ゆきお）

東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授。1961年生まれ。東京学芸大学大学院修士課程、ランカスター大学大学院言語学科博士課程修了。言語学博士。専門は辞書学・コーパス言語学を応用した英語語彙習得研究。NHKテレビ英語講座『100語でスタート! 英会話』（2003-2005年度放送）で講師を勤め、日本で初めて語学番組にコーパスを導入。中央教育審議会教育課程部会外国語ワーキンググループ委員（2015年10月～）。著書に Corpus-Based Language Studies（共著、Routledge）、『英語語彙習得論』（編著、河原社）、Research on Dictionary Use in the Context of Foreign Language Learning（Max Niemeyer）、『英語語彙の指導マニュアル』（共著、大修館書店）、『コーパス練習帳』（NHK出版）、『コーパス英語類語使い分け200』（小学館）。小学館コーパスネットワーク監修。

◆ 講師・発表者・指導員（順不同） ◆

投野 由紀夫	東京外国語大学大学院総合国際学研究院	教授
齋藤 哲郎	カリタス女子中学高等学校	校長
伊澤 悦子	駒沢学園女子中学高等学校	教諭
佐藤 貴明	聖光学院中学高等学校	教諭
松本 浩欣	相模女子大学中学部高等部	教諭
横内 敦	横浜清風高等学校	教諭
中川 右也	鈴鹿高等学校	教諭
池口 勝裕	米子松蔭高等学校	教諭

◆ 特別委員・指導員（順不同） ◆

平方 邦行	工学院大学附属中学高等学校	校長
金丸 紋子	カリタス女子中学高等学校	教諭
松本 浩欣	相模女子大学中学部高等部	教諭
田中 歩	工学院大学附属中学高等学校	教諭
吉田 美和子	鹿児島育英館高等学校	教諭
川本 芳久	一般財団法人日本私学教育研究所	事務局長代行
山崎 吉朗	一般財団法人日本私学教育研究所	主任研究員

私立学校特別研修会・外国語（英語）教育改革特別部会〔東日本エリア（神奈川）〕 実施内容概要

平成 28 年 11 月 25 日（金）～26 日（土）、カリタス女子中学校・高等学校及びリファレンス西新宿大京ビル貸会議室で開催。参加者 26 名。初日は、カリタス女子中学校・高等学校での授業視察、校舎施設見学、同校教諭金丸紋子先生より実践報告、同校の英語科・仏語科の先生方との意見交換を行った。2 日目は、東京外国語大学の投野由紀夫先生から講演、平成 27 年度文科省事業「英語教育推進リーダー中央研修」受講者の先生方によるワークショップを行った。今回の研修会では、視察校の教科センター方式（教科教室型運営方式）の施設見学がこれまでの研修会にはないプログラムとして行われた。視察校が仏語の授業も公開して下さり、英語の授業と共に仏語の授業の見学を目的に参加された方もいた。英語以外の外国語の授業が公開されたのは、本年 6 月の大妻中野中学高等学校での研修会と 2 回目である。大妻中野中学高等学校での研修の際も、今回の研修会でも参加者は英語・仏語の両方の授業を熱心に見学していた。

開会式



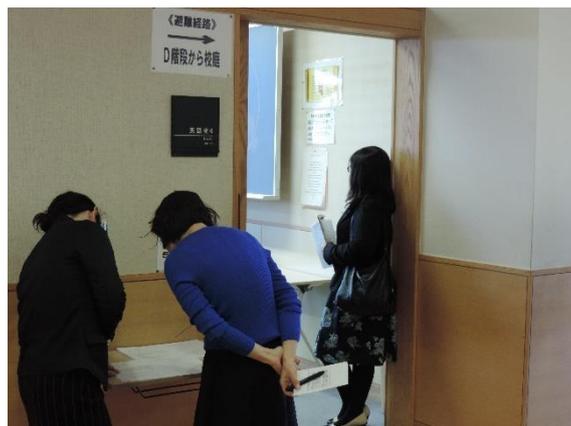
山崎吉朗・一般財団法人日本私学教育研究所主任研究員が挨拶した。研修会が昨年からの大きな会と共にワークショップも入れて 2 日間の研修会を行っている意図を説明した。そして、現在、英語教育は改革の先頭にたつて、国の政策が動いていることなどを述べた。また、今回の視察校の外国語教育についても触れ、フランス語も学習している学校であることを紹介。学習指導要領の中に英語以外の外国語教育についてもカリキュラムを支援するという文言が入り、概算要求の中に、昨年までは英語教育拠点校だったのを外国語教育拠点校にして、英語教育以外の 6 校を制定して拠点校にする

という。国としても英語以外にも力を入れていこうという姿勢が見えているので、英語以外を学ぶ生徒達を見て頂けるとよいかと思うと話した。参加者の先生方に色々なものを会得していただければと思うと述べた。

齋藤哲郎・カリタス女子中学高等学校校長より挨拶を頂いた。同校の特徴として 3 点を紹介された。まず、英語と仏語の複言語教育を行っている学校であり、カナダのケベックの修道女会が来日して創立した当時から続けている。これは、世界を見る窓を広くし、色んな視点でものが見られる生徒を作りたい。中学では英語は 6 コマ、仏語が 2 コマでやっている。高校に上がるときに、どちらかを第一外国語として選択して、大学は選択した言語で受けていく。2 つめ特徴は少人数教育。中学で英語、仏語と数学の 3 教科を全てハーフクラスで受ける、1 クラス約 40 人でするので、20 人弱でやっている。教室も小さな教室が沢山ある。今年度から、中学 1 年から 1 つのハーフクラスを英語既修者クラスに設定して何らかの形で英語に触れてきた子どもを集めたクラスを設定している。3 つ目は、教科センター方式、教科毎に教室がかたまっている仕組みになっており、生徒達は時間毎に教室を移動しながら授業を受けていく。主体的、能動的な学びの姿勢をつくりたいということで、10 年余りに新しく校舎を建てた時から取り入れている方式である。これらの事を紹介頂いた。

研究授業

5 限目、6 限目に英語の授業を 6 コマ、フランス語の授業を 4 コマの授業を見学。グループワークが多く取り入れられ、電子黒板を用いた授業、少人数学習を見学。フランス語の授業も見学。参加者からはグループワークの指導が参考になったという意見が多く見られた。フランス語の授業を見学した参加者からは、フランス語を履修している生徒のフランス語の理解の高さへの驚きの声が聞かれた。



校舎施設見学

開会式で齋藤哲郎校長先生より紹介のあった教科センター方式の校舎を見学した。見学時間は30分であったため、もっとじっくり見たかったという意見も見られ、見所の多い施設見学であった。教科教室型運営方式の施設は参加者にとって珍しいものであったようで、校舎見学は大変好評を博した。



実践発表

金丸紋子・カリタス女子中学高等学校教諭から実践発表を賜った。アクティビティを導入にして共同学習について理念、同校での実践の紹介、生徒からのフィードバックなどについての説明があった。



・質の高い学びの実現のために共同学習がどういった所に効果があるのかということが、学習者の心理と一人一人の学びの質という2側面を意識すると見えてくる。学習者の心理の面からは①学習者に心地の良い学びの空間を作る。グループ学習の方が、緊張感が少ない。②Peer pressure、「恥をかきたくない」というプレッシャーが10代の学習者には強い。このプレッシャーを、恥をかきたくないからその前にグループの仲間に聞こう、一緒に頑張ろうというやる気に変える。「学びの質」が高い授業を実施するには、①みんなが参加できる授業。②能力に関係なくみんなが学びを体験出来る授業。

・共同学習の原理

- ①Positive Interdependence: 一方のみが学ぶ関係になっていないか
- ②Individual Accountability: 自分も学習に責任があると感じているか
- ③Equal Opportunity to participate: 一方的な関係になっていないか
- ④Maximum Peer Interactions: 誰かできる子がやってしまったのではいけない。「皆がやる」という教員の指示が必要

・学びのピラミッド

- 「先生が話すのを聞く」は学びが最も浅く、「自分が教える」が最も学びが深くなる。共同学習ではピラミッドの深い部分の学びが起きやすい。年齢層が上がるとこの理論を示すことで共同学習に素直に取り組むことができることもある。
- ・効果的な **Active Learning** において共同学習は基礎にあると考えている。この中でソーシャルスキルも磨かれていく。
 - ・ペアワーク・グループワークを取り入れる時
 - ・共同学習の4原理を意識して計画・実施すると効果的な活動ができる。
 - ・”Think- Pair- Share”・・・「一人で、二人で、みんな」→「一人で、二人で、みんな、一人で」
 - ・ZPD・・・少し背伸びをさせる課題が効果的（ヴィゴツキー）
 - ・ペアの組み方
 - 3つの組み合わせができる。(Face partner, Shoulder partner, Cross partner)
 - それぞれ声のボリューム、ノートの見せ合い、表情・ノイズなど異なる要素を考慮することができる。それぞれが異なるスキルへの刺激が期待できる。
 - ・共同学習：発表の順番など教員が細かく指示を出していく。共同学習のトレーニングを習慣づけることで協働学習：役割を自分たちで分担し自立した取り組み・工夫が見られるようになる。
 - ・共同学習の効果・生徒の声
 - ・苦手な学習者もいるが、効果は感じられる。
 - ・個人・ペア・グループでの形式別で効果があったかと言う質問ではグループワークの評価が高かった。
 - ・マイナスの意見について
 - 「関係ない話をした」「周囲に気を使い負担」→ 協働学習をする意味がここにある。教員からの指示を検討し、関係ない話をしないよう注意し、意味ある会話をするようにしていく。また。コミュニケーションスキルを磨くことは中高で学ばないといけないことで、負担を感じる生徒に対しては、生徒に説明を行うなど様々な取り組みを行い生徒が慣れていくように働きかける必要がある。
 - ・共同学習に取り組むにあたっての課題は教師のマインドセット、授業準備、多様な学習者、評価方法がある。

質疑応答・意見交換会

研究授業で授業を行って下さった先生方への質疑応答を行った後、参加者の先生方が疑問に思ったことを直接聞きに行く形での意見交換会を行った。



講演

投野由紀夫・国立大学法人東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授から講演を賜った。英語教育の現状と CAN-DO リストをどの様に英語教育に活用していくのか、更に語彙教育についてご説明頂いた。参加者からは「英語教育改革が何故必要なのかがよく分かった」「CAN-DO の正しい使い方、CAN-DO に基づいた授業の考え方を知る事ができた」「語彙学習がすぐにでも取り入れたい」などの意見があった。



・2050 年までには、かなりのグローバル化が進み、英語が上手に話せないと働くことが難しくなる時代がやってくると予想されるが、現在の日本人の 4 技能は、発信能力が低い (Speaking と Writing)。学校で、週 4、5 時間も英語学習をしているのに、能力が育っていないのはどこか効率が悪いのではないかと考えられる。

・文科省の英語教育改革のポイントは、入り口・中間・出口の 3 つで、包括的な改革といえる。この点に関しては、私立は一貫で教育を行うことができるのでやりやすいと考えられる。その利点を上手に活用すべきだろう。

・CEFR は汎用枠なので、用途は様々である。自己評価をするために全体像を見渡せる表みたいなものになっている。指導表を強制しているものではない。学習上はカリキュラムの作成から形成的評価作成など個人的なものにも使える、テキストの作成にもつかえる、教員養成にもつかえる。

・Can-do を入れる理由：先生生徒の目標のとらえ方を変えたいという目的がある。文法解説偏重の授業から「ことばを使う」授業へ。時間のかけ方が偏っているのもっとバランスよくしていかなければならない。また、CEFR-based CAN-DO list は、他校のリストと比較できる。Can-Do リストの作成は小・中・高・大の連携を滑らかにする統一目標を作るという目的がある。全体を統一する枠組みがないと、各学校が作った Can-Do が他校においてどのレベルを表しているのかが分からない、そのため学校間の連携が上手く行かない。そのために汎用枠をもとにした Can-Do リストをつくるのが重要。

・Can-do を作成したあとに、その抽象的な Can-do から「より具体的な Can-do」を作るのが大事 (portfolio に落とし込む)。そうすることで教科書の内容や単元、学習活動に紐づけることができる。学習活動を通して達成された具体的な Can-Do が、全体的な Can-Do の達成につながるようにしていくと Can-Do の使用の幅が広がっていく。使える Can-Do になる。

・Can-do：発信型と受信型

【発信型】「できる」・・・具体的な機能を実現する語彙や文法が張り付きやすい。

【受信型】「わかる」・・・テキスト・タイプの情報でくる。文法や語彙とは張り付きにくい、テキストの種類・長さ・複雑さ・語彙レベルなどが規定される。

・以前の教科書は語彙の数が他のアジア圏の学校に比べて、語彙の量が極めて少ないことがわかっている。現行の中学校教科書では、語彙の数は増えている。中学校レベルでは他の国に拮抗している。良いことではあるが、内容が難しくなっている。しかし、語彙コントロールが甘く、重要な基本語彙のカバーが十分でない。教科書のトピックに由来する語彙ができるため、難易度の高い単語が中学教科書に出ているなど、教科書によってばらつきがある。

・語彙指導で力をつけることは極めて大切である。教える際にどこに力点を置くのかを見失ってはいけない。会話で使われる 1 千万語の内、最も使用される 100 語が会話で使われる単語の 7 割を占めている。この 100 語を使いこなせていない。TOP2000 語 (最頻：会話で 9 割、書き言葉で 8 割を占める) をしっかり教え込み、使えるようにする必要がある。語彙サイズばかりを考えないで、基本を押さえる。TOP100 語+2000 語は使い方が複雑、用法の厚みがあるため、4 技能の学習活動に繰り返し、入れ込んでカバーすることで地力が着くようにしていく必要がある。言葉を使った指導の前にも語彙指導をさせることが必要。

- ・教科書 本文の語彙を、教員は「目利き」して、レベルわけしていく必要がある。単語の情報量で分ける。語彙レベルに応じて指導方法を変える。教員も生徒も目利きが出来る様にしていく。
- ・ **Big words** の周辺に頻繁に使われる言語表現があるので、そこを注目すべき。その表現を使うような学習活動を考えるのが大切。
- ・ 語彙は **collocation** で覚える。自然な組み合わせを覚えている。基本 100 に **collocate** する 2000、3000 語レベルの単語をセットで覚える。仕込みをしっかりとすることが大切。語彙指導はやり方を教えることが大切 **Can-Do** をつかって、生徒のレベルにあった教えることに使え、工夫のしどころである。
- ・ 大学受験に必要な語彙：基本 2000+次によく出る 4000 語：覚える甲斐があるが、それ以下は、あまり気にしない。
*入試問題の難しさに振り回されないことが大事。
- ・ 4 **strands** を意識した「授業」の組み立てをおこなない。 **meaningful input + output** の箇所、覚えたチャンクのリサイクルを行う事で、覚えたものを使えるようにする。自律的に一人で勉強していける生徒に育てる。

ワークショップ

文科省事業「英語教育推進リーダー中央研修」平成 27 年度受講者の先生方によるワークショップを行った。今回は「Classroom English」「Reading 1」「Reading 2」が行われた。全て英語で行われたワークショップは今回の研修会でも参加された先生方の刺激となり、授業で使えるアイデアが得られたという意見が多く見られた。続けて行われた質疑応答でも、指導員の先生方が普段の授業でどの様な実践を行っているのか等に着いての質問が出た。



閉会式



山崎吉朗・一般財団法人日本私学教育研究所主任研究員から閉会の挨拶があった。小学校での英語の話が色々な所にてできていたが、小学校で中学校の半分の時間数をかけている。2020 年から動き出すが、それより 2 年前から動き出している。1 年ちよとしたら小学校で導入されている。英語を学習した小学校の生徒が中学、高校にあがってくる、こうなると生徒毎にすごく英語の力に差が出てくるのではないかと、教科書の中身も含め英語は変化していく。我々は生徒の英語の力の差が生まれる可能性についてよく考えてないといけな。また、次回以降の研修会の予定について説明し、研修会を締めくくった。

◆ 都道府県別参加人数 ◆

No.	都道府県名	参加申込数	No.	都道府県名	参加申込数	No.	都道府県名	参加申込数
1	北海道	0	17	石川	0	33	岡山	0
2	青森	0	18	福井	1	34	広島	0
3	岩手	0	19	山梨	1	35	山口	0
4	宮城	0	20	長野	0	36	徳島	0
5	秋田	0	21	岐阜	1	37	香川	0
6	山形	0	22	静岡	0	38	愛媛	0
7	福島	3	23	愛知	1	39	高知	0
8	新潟	0	24	三重	0	40	福岡	0
9	茨城	0	25	滋賀	0	41	佐賀	0
10	栃木	0	26	京都	0	42	長崎	0
11	群馬	0	27	大阪	2	43	熊本	0
12	埼玉	0	28	兵庫	0	44	大分	0
13	千葉	2	29	奈良	0	45	宮崎	0
14	神奈川	5	30	和歌山	0	46	鹿児島	0
15	東京	7	31	鳥取	0	47	沖縄	0
16	富山	3	32	島根	0	計	26	

アンケート結果 回収率 92% (24名/26名)

○問1、当研修会への参加目的をお知らせ下さい。

- ・英語で授業をしていて、上手く行っていないと普段感じていたため、他の先生方からアイデアをもらうため
- ・最新の英語教育の動向を知り、今後の授業に活かすため
- ・施設を見学し、勤務校の施設の改善の参考にするため
- ・協同学習や英語での授業展開のヒントやアイデアを得るため

○問2、当研修会の各プログラム・内容等について、参考になった点、感想、意見等をお書き下さい

○研究授業

- ・グループワークでの授業の組み立て方がとても勉強になった
- ・生徒が主体で実施する授業を実際に見ることができ良かった
- ・沢山の授業と学年の授業が見られて勉強になった
- ・検定教科書を使ってどのように All English 授業を行うか参考になった

○校舎施設見学

- ・生徒の人数に対して施設が広い、教科センター方式は目から鱗でした
- ・生徒達が手を伸ばせばすぐに教材や課題が届く場所にあり、生徒の主体性が育まれていくのを実感した
- ・施設が先進的だけでなく、先生方の配慮が行き届いている様子を、日々の教室や学習環境を見直したいと思った
- ・学校の特色が分かり楽しかった

○実践発表

- ・とても分かりやすく、実際に自分が体験させてもらう活動が含まれていたため、イメージがわいた
- ・グループワークの方法など、すぐにでも使えそうで大変参考になった
- ・具体的な説明が良かった。AAA は実践しようと思う
- ・協同学習の大切さが分かった。取り入れてみようと思う。

○分科会（質疑応答・意見交換）

- ・一人一人の先生方が丁寧に教えてくれた
- ・とても参考になった
- ・本時以外の授業についても教えてもらい、参考になった
- ・授業の取り組みが、本音のことも聞けて良かった

○講演

- ・語彙指導を間違っていたなど先生のご講演であらためて気づいた。これからすぐ直していこうと思う
- ・大変勉強になった。東京まで来て良かったと心から思えた。もっといろいろ教わりたい。
- ・CAN-DO の正しい使い方、CAN-DO に基づいた授業の考え方を学ぶ事が出来た
- ・CAN-DO リストを作成したものの、どう利用すべきか分からず、そのままにしてあった。CEFR と関連づけて考える事が分かった。CAN-DO リストを見直したいと思う。生徒が自律学習できるように働きかける工夫をしたい。

○ワークショップ

- ・ British Council のやり方はおどろきでしたが、自分の思い違い、誤りをたくさん気づくことができ感謝
- ・ 英語を自主的に使わせようとする教育が実践的に落とし込まれていてためになった
- ・ 英語で1日授業を受ける体験は刺激になった。Classroom English をはじめ授業に持ち帰って早速実践してみたい
- ・ 興味・感心が湧く内容が多く、ためになった。生徒の視点に「より近い」ところで考えることができ、始めて気づくこともあったので、とても良かった

○意見交換会 (2日目)

- ・ ふだん授業で、一人で悩んでいたことをほぼ全てきけて、本当にきてよかった
- ・ 多くの学校の事例が聞けて良かった
- ・ いろいろな先生方のいろいろなご意見が聞けて充実していた
- ・ ワorkshopの内容が深められたので良かった

○問3、今後の本研修会への要望等をお書き下さい（例：研修会で取り上げてほしいテーマ、課題、実施してほしいプログラム、継続もしくは改善を望む事項、来年度以降の開催時期等）。併せて、当研究所の研修事業等に対するご意見がありましたらお書き下さい。

- ・ 単語・述語を覚えさせる方法、スローラーナーでも楽しめる方法が知りたい
- ・ 英検5級が取れない高校生達に興味を持たせる方法
- ・ 今回、参加し、とてもためになりました。そして、自分の英語の実力のなさを改めて感じさせられ、焦りを感じた
- ・ このような研修があればもっと参加していきたい